



飛世影仙



多



吳是之龍を重う
鱗甲うう記白烟霧
おこ川々白成ふす
烟音龍を生る龍烟
霧を吐くは龍を
月を就を思ふ身也



就も又平人とも心争
あはれものゝ一龍奇を
宗一一人物をふす
とのく妙く其龍乞又
昇る是を真龍とす
亦此青井の仙を画龍
あるも画龍あはれつり
浮生の龍ありかぬのぬ

不龍仙是也其とら
画龍をたはし河ま
りつ真龍をたふめむ

天明七年未暮 暮雨巻巻曉臺

淡路島 溜上こきめ 白ひある
明石の親仁ハ堅ひ半式
杖不し浦山ヶけて二三里も
奈す急なる 釜のいさり火
業平も亦住るふうしる向
志つこき 女さつれ又り
うすましくぬ 膝一まを説話よ
曇の衣ふとく 喜れ秋
今朝の月又ちり 上りの茶の席
おを称する 山の端の茶

お肉養の跡きぬ 露は風
猫足ぬのまは おひす
雪消とつめい 食の心中や
此谷のまぐれぬ くり道と
夏極の砂りと 運と前らし
枝珊瑚樹の 並木有るく
と人の玉子産るん 桑をうけ
とく子もあき 古縁のまれ
塩も又何の 風味もあうり
既又あうけ 亭ませは

鹿又目々粘ハをあれさるる
月んあまきく一任小屋の月
鏡一仏秋とさむく横えて
や門この幽果消りともは露
とある申振とくそ色向られ
奈露の原のあるとおす
大階子有取天とささくおろし
今や古くくくく神鳴
ぬんくくとさの鏡は毛のて
三才六句うとつきのけふ

第二

踏射ト尺

撫必老人序と出と存上虎
春つく霞是餅の銘
紗雪山夢暮と暮くん中みせ
天と涉貫み海あしり
簇又虹又月をつらぬ
秋風小口とり門らつ

あ久つく措桐掠の葉落る時
田舎の野 瑞鳥ひよと
賜指と鉄炮あつてさめつとつ
心とささひしきあめふ浪人
袴着とさあハサキ節神田節
こつよとおいと音 糸つと
物孫さき首うぬけとや飛つん
心ハ南真のうらをりよ止ん
山寺の槐乃夕暮来てるおれ
徳利の底の玉をあつハ

月の運び天目の瑞たきうとし
跡をおろして雲の糸と智
釣石形ハ新お似と走とせ
鞍前ねと海陸おあ家
夢むさうりきり糸ハ只渺々
たろこ花さくうの旦夕
腰折を吉圓法師とゆあり
紙子お杖と引とがくと海
月と舟お花けのある奴つき高て
志り〜あれ〜ん〜か

禰宗の意ハと云て控おろす
佛祇七仏生野の二河
月の夜お明ぬ河縁の周の水よ
子と思ふ鯉のこも夢也
才一才二の弦ハ志よきとせ身成刻
下女扇のさハかきゆく紅
ま風の胎アウラくさくと作れり
烟窟は狗とよほし狗とよほす
おの先か徳白の水の流やある
中うさふせり山交ふ山

第三
巖泉

幡とぬくと音の夜の心棚くおろ
なよ園あり蚊の角の先
舟の元入江尋る舟つけ
うふちのそえし草の二ひ
沖と水ハとろめんらむる夕月夜
雨ひきまのちかをさるおほ

雲よりく飛捧ハ龍よまゝくうぬ
雷の一勢峰起するま
抹香みハ陳の品とくことれを
大公まゝ、万日のいかり
遠ある溜水のほらうり芝の獨
序書ハ海老雜魚負て海有
出向ひぬをいの冠意とく人
ハ龍の巾裏をうけ行月
秋の冬玉の臺ハ大老やうと
分列經みとくれとくま。

一服の所擲ふり意とく
萩の美葉の角武本を西
如しき女寂茶かた雪の際小
いゝあふ意とくめ古塚
糸糸小之味線の聲の少ゆハ
宗のよきひ男とくことある
尾うけハ狸のやうみ意とく
亭子多石仏戸とひと音
陰若者茶と考る比獄さ花して
或ハ飢てハ鉄の芽を

六 ちれりり 鉛の冢は道りす
七 器の年を是秋の空
消炭の鬼月かそく来り
夏腐と串かさくて 禮みかきし
室あふ抄子をそくす
以下脱

第四

一山

夜息ふとん 猫のふりり月の月
天の戸ぬか 押入る 杉
椽桐箒械の糸の家ちり
釘おかしき 沖つたる浪
うきあるあるのいさりの油皿
孤村のあしき 登ひぬるこ

去々ぬ山登々の縁と踏まよひ
園をさへして仙境に入
付歩を利体坊丁令 登々
出る息も吐く引息も吐
三白ほと死して居て中起る
神をわくを移す 在業
掛現は廟の扉あしひき
鬼の子形のけ界の月
神如ハ秋格木断の組
百味の家れ家智 振出

梵天の園もなまはる海り
吾らと吾原を引出古のあり
雲の化も忽射とあし
それより任持の任家山陰
黄金の石塔いと何 塔いと
うさひもあき流院の折紙
律義なる親仁の方へ使志
法憐のさくけく万の
意のあち流飛の罪は沈むとも
仄より少圍のらさ

近い所清くくくふ定志やけふ
いとく各案の勢よりせん
卯の月鑑のつるをくいとて
次への浦より船はけり家
秋夜を湯屋ハか遠くぬき
區留志のく産浦備らん
眞途より沙梁波の松子とえふなり
まぶらうある葉のあはは
河童も若鳥盛の夜啼と
樹のくもぬれ心中のよ

才五

緑糸子

行春や上野つりの道もく
梅木あふ木の詠はらすらふ
心も親世左をさえつり
あゝくの産れ山を厚敷
切癒のくもく月の新くす
風吹おとす六つ指を家

縁色も幸さうり行水更と
借新きくきりく寸未
若勤之引むきひさ萩さき
唐さるくきま猪首公
そんてきふ菩薩もくふ天降り
小窓ちりの眉百白毫
世の中を忘れぬ唐木此甚初
感傷交もくわす焚つけ
朝あけけ金の猫の遠出と
西けりのさふくさくさく

さうりのさうり老老仕り
空けられり引こもる月
小向の丁ハ後陳りひくつて
そ晴鳥ハ九節判官
大僧正列のそくそえさうり
止観の意かす中縁あははと
濃紫けおまはくとも守よ似す
白いあくさおあはく雀つと
意字のかれとくく鼻ケスキ鏡
月そきやゆきけ灯のさや

きりくしのつろろと詠を
孫ぬつやふ浮き空
酔のわと流流子なるや
得胃のよきりし平家門
なちみ小音上とつろ
肉羊の義智堂ういり
腰ちみ仕く来と中とち
馬ひ編子のぬめれ蛇
おとと訓蒙園彙ふ必
永名の柳三月 二日

茅六

仙松

山おろしの嵐疎おろし抽え
松々志くれ何もの秋
物中のうき消や二月入
さてハ鄰のさけし
夕く文お春負ふて 五
うきちみひうき声うき

辰也未初小姓也よるふさこれ
至形所よりくさき 辰也
挑灯と違よるせつ の 番書
うとんあゝあゝは津田の老松
兼平ハよいあつとふ 合々
巴、腰と抱とやりりり
新河のまん中祓の夕暮ふ
あゝ笠ときくと出る化物
船荷より舟楫のありし身として
弘法様ととのむ世の中

月夜小酒の濁ある 井戸をん
長共のあとの妻やむのしの
すり屋よりと大石備しの書清
國のあゝしよやある 勘 畧
雪とあり何城とあり 治行義
死つハ生れ生れと 冬 意
け世界と何とつ心の宛より
火吹竹吹風を 冬 意
勢ひハあやとける 猫の鼻
小酒は鍋あり 羽のええ

こしをなすあゝ先の山林切つて
久まふ極とまの神解
きよ絶^{カシ}吉田とのまりうけりも
上子願うくふ何の月
家ふくく雪隠と打強
あまの粉糖よなま川秋旁
そ夕妹り子あましあすひつけ
ぬり若やせとあまこほ
あまのま思ひを減よ包めとも
うまの山は鹿やれぬ

第七

ト宅

猫の毒夫婦をいくと怪ひり
山川万里もや糸くくのそ
大階子むらさくけと鹿やむ
さく岩端坊落る月
うしなま^まのあまし^まく^ま
まは二斤秋そまおしき

よの事して行言もくうり由のこゑ
ても公義もくうり夕暮のそ
き風もくやめぬ勢もくの勢
うら詠や〜あ彼の冥府
旅衣羽絨骨の扇地あり
ふ〜事と何て之中一み字
よこのをたれさうのき〜りれ
汗代もむ〜〜〜〜
血〜〜〜〜〜
猿の女よ〜〜〜〜〜

岩の山家もくうり何月の
さ〜〜〜〜
目あよ〜〜〜〜
あ〜〜〜〜
か〜〜〜〜
山風もくやめぬ勢もくの勢
山孤り何れ〜
向ひの谷のこ〜
標か〜〜〜
〜〜〜〜

中島田原をきくと見ゆらん
自形に於て有明の影
秋の衣履居士やとの氣遣も
日中よハあき家の夕暮
風風の晴く川海とよあれさ
東の障子ようとよあれ
于時世さる芝のや〜朝何〜
律草あねにさるふおほ
仙人のお〜影とて留むの記
鏡おろ〜お〜谷の戸のそ

第八

白詠

海鳥揚や壘中の雪れ入日影
飛揚の翅場朝よ乃〜
翅よ内道うらさむおす〜
江の絶の流ハさむ〜
二舟の折舟の影に〜
一舟す合のか塔地の秋

むらり山林な小芦の露
牛もろ原の自な乃を
徳の系山いふのうふかきん
つし付し廿のふやせり
砂やお油酒のよひ路吹とよ
たきれ時の干瓢の宿
揺簾の大入道や名遊らん
毛ま門まきふまはるあ
舳の帆の尻と揺よの寸月
廣少路ゆくおまうけの星

うらり甘泉殿の夕廣
皇子皇孫地車のま
ま離老先盲目の博在や
若七組のうらり家とひつ
或時きさんほよ下うそ水と法
程おのむくしのか賀音の声
待後小利の之右の何うのま
おつハ満しき何んの人の影
山燈と帳のらひなるもあま
極の朽木の洞よからきて

風呂好の仙人ひとりおはれ
 物語の女一巻二十一名
 世にしるす万葉集と恋の月
 帝の下御むすよきとて
 秋の海龍宮の蛇と海
 とも年菜種畑とりあむ
 折えは志の嶺の管のすゝり
 ぬね甲の砂浜のうら
 河古あ院の古松とふと詠や
 ちみまの横と海ありうら

才九

杉化

詠携り秋の夕暮るる子共
 萩は志りれてほの餅の花
 家志れれと戸と海とあすん
 浮る河原の女ひとり
 さが清よるる月あまとりあは
 田舎ものともふかきき

昔椀大美人ハいゝ 名は
神の仔ハ杉子ハあは
な女と名法玉のふきあ
一行脱

戯よるる 祝ハ喜ハ寝病ハ
人々ハくハ草の海を
の張ヤ岡アハ茂ハ相の
六浦古やうハ口上の月
酒ひとハ能ハ谷とのハ
あ毎ハさハふハ草の

花ハくハいハさハ
とハくハいハさハ
花ハさハ法ハ天ハの
只那ハくハりのハ
柳葉ハとハおハま
ふハくハさハお
王ハまハのハ
二階ハあハれハ
やハ中ハあハ
儀ハ友ハまハのハ

そわ〜〜 七人あゝの家のこゝろ
又此日よあはれの藤原
お妹を甚そなたるるあはれの
宿かきよひみ秋は声まゝ
けさき〜 始末よら孫ら中身ま
のの屋敷のめうけ候む
徒ら心と怒す 血あ〜〜
標より下い〜 地獄
有〜 世を恨とあ〜〜 花の時
は合あす只今 ねま

才十

本歌

宿の夾豆腐つ〜 年の暮
暮待夕日牛肩 於 け
朝控〜 送ひ〜 雪とけ
宿架の廊り〜 くりあ
藪陰よ月と様と ちの本と
五々とも川〜 賣養か〜

蘭亭の名ももところへ立つて
赤松の榊 沙茶の条や
山一の谷 なる 常 音 近
善きしる男とんれハ細引
出へや馬を路の里ハ路はふり
尾物清き 削毛松の声
谷ろくく 湖榊山あくと流り
医者上人の寂寞の月
上人の匂はとる力よ行先
あやいとんれハ 葎 香 家

云ハ根ハ夜這ハあもぬり
庭とくくむる麻の面新
母さん何とよてもよくと
在ふの初れぬ本の大更
吉さ東の方ふさひ 出
京ハハと列ぬ孔雀舞
白ひ態赤ひ依杖の麻も何
俳諧を 初とくさ物あま
番ちす 泥坊のやうよあまを
つるを 女と是也 天 地

非鳴の火消の面く神嵐
切控よある河津江泥坊
名自中糖如しの控よあり
傾のけ世よ請人よそ
生玉ハ瓶如村よ乞り出
目やう鼻やう只ぬり殿
人並よきれとも食ハまわらう
たひきふくも身のかいゆさ
いとん振さすふ思ひきれめや
或ハ脊骨よ控くく

川門とそり赤子の胸音とあ
春雨志よわくとぬる夕月
目跡考く魅釣る糸漕り
清流の急よ鼻とれと童
水岩よ砂の岸と信つあり
流よ急つるの中事とけ
河津漢の家よ痛と君とよ
前生ハ是控といつる
汁おして今亦瓶と塩ときハ
忽揚り招りぬり

乳母ハ必ス吉ハ杖ト子ヲ持テ
むくしのう家よつる出矣
爰チ訪るるあく月の消てな
赤ひ細引云保のう波
むねて乃る金沙。おる交りて
屋形ありある妹と云つ
古医志の吟しなきし清信
葎草よ乃る陳は君ぬる
従るそのおもよとある花のそ
桃青の園よ一流ぬる

才十二

揚水々

大江ハ桂吟しと云 とうや
田圃ハとみ雨のいきほひ
山陰ハ薙ゲルよみ奉る風吹と
摺子よの招よ拂珀志と
仙人の湯店あれく月をう
老カよわえとる大の長あと

秋の暮の梅の形のちよじくと
茶やの鈴のかけさびき
倉棧やるれハ網代の下すれ
子家もと懐はあさそやの意
うれさぬは教さるもゆるさむ
あつとぬり分てす糸くしきと
光夫いさぶやがもくくしき
身廣のまなぬらひ草屋
まゆりや左の志とあふ妙舞
雪の中のりがまのあつれ海

初は月お招涼のくあつ一樹を
小つくひ姥の序ふ出ーま
産まもくや新あのかゆかあり
雛もとあつ宗明のあつこ
あつ味場のハ網とさくやあり
くま指の何とさえさくや
狩宗の水志くもえの水は海す
そ徳日水宗あつたす
持徳は徳の命と持徳
まゆりはあつ河あつたす

雪の舞をみよむる朝の
山神のつとめ奉る男
葛城のよりの月を紙二束
ちるち正の法をうりま
やうく子夏膚の家をわきま
あまのつとめのつとめ
あほりり子小若一人の法供を
行くはつとめ踏ねてはつとめ
あまのつとめのつとめを出して
くわすの子の二束をうりま

才十三

嵐亭治助

霜のりあつとや清む生美味
木の葉ちよろしくきある焼食
繪むしろは松とて川ちと淋く
さ何むと川やき今をやるぬ
水ハ涼し朝ハきし月を流
流す水のうとハ大木とま

俳諧の沁人すくらき山ふくら
あゝ桑あゝまよす日の家
聯寮の空余のうつり物と
とやあゝあゝあゝ家と毛むと
あゝあゝあゝ草履の下に月比
細の申一きつりあゝあゝ
夕朝の夢うらたひとあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

粉のお見も花をあゝあゝ
泥^ス泥^{カシ}の瞬^{ミナレリ} 魅^カ 怪^カ 怪^カ
沈のぬく氷の音あゝあゝ
ちむさき宮の夢あゝあゝ
打^ヒ差の稗のうたあゝあゝ
茅の笈あゝあゝ 洞
西りの流あゝあゝ 雪あゝあゝ
松の古葉あゝあゝ 音あゝ
翅あゝあゝ 蟬の初音もあゝあゝ
竹の美あゝあゝ 足あゝあゝ

弘法大師は茶やまやまのひと
都えの湯あきのうりよ阿らね
月と角と夕間暮して矢より
秋風簾をくくして鮫こまの
猫の古訓てあつれて古香茶
新ハ世中の水の水の家
麻ろけとやつれ果して持安
茶つけとらまを喰よりいと
花ハ只とてのひとを嘆とめて
梅少るよ毎のまよりくれ

才十四

種と東の離の下とて本茶と対すと
葉より茶といふとて茶と法とす

螺舎

月とと医と余茶出挿の名有
茶茶茶阿あり太まま家の隣
又茶茶の子世せんうくとよ
猫の羽よりきとるもかれあり
燈のわくれよとつとありのま
今ハ夕暮あとのおひら

祇齋の癖を集めよあうらう
思ふ居か尚平あうえとく日
命と心とすえとを急教し
目口の出来し痛実よ痛
小松園身の東より尚れ
汗の満子の月と志るま
切妻の松よりあう志るあや
大塔の文のむしきよ詠あよ
後とも心氣の強きよあう
えあやの松あう男あう

蘇蘭の志持あうらう
妻のうつらええと急るも
うく海来の鳥の心るあ
田標りあうと悲ひあう
足跡の深より船よあう
浦の遠よこめるあ
さ花しきよ丁の築や友氣
あれと心あうよ小松と秋の
冷あうとて修あいの干あう
ま〜あうあうあうあう

あまろく行 西行や
今度定家の江戸へ
勅撰に練る昔西のりきま
牛のま馬の社に磨き
いとくまき 無上徳の作
菓子屋 山音板寺と号
らくりんの山嶺松山麓とてひ
あまきとあまきとてか
きと急り急と刻刻はと去り
竹舟門下よりら 某

才十五

巖翁

長天も地もつきまなり 庭の雪
氷のくら風のはつら
河縁のほ二丈何ゆりよ引のて
情あささきつて 雲
翅著の一本鏡は今朝の月
歌の目もとつあき

神の秋白の鳥と何々
西風の麻のハツの赤身
鈴刃のち子の手はくれう
枕屏風と建物の時
砂外まふふん草のうま
をとけのちい白瀬
うき世は物との店と少門と
彦山の雨の歌 春原の月
秋あまハ丑湖う門まの夕を
うしきま申れううの船

吸筒は花も紅葉もやまめ
さう日うつまの極楽の旅
秋ひと何同金のう門
よう家のう代はハ
組は神の籠とむく
志のき帝の伊昔はん
桑の跡と昔のうはは
静えううを娘あんなり
縁巴とおねとのうり
砂金百両海光二十盞

大徳のふ尋の底は世界有
入日の内は云々之の猫
赤鶴月の細と引ととめ
昔来ニ節てかゝるる家
秋風はわくしとゆく旋
癖子トのけしととととと
尾にぬくと二つの山をげんと
かゝと成くハ又存子よハ
帳の眉の善は翅のさえつれハ
凡し心き方便のま

才十六

嵐窓

志く海や和田の笠松下法を
等市武志よハ尾葉系本拓
ふ年の蕃化する月流て
くゆく重徳と鈴の音作
くくくある根芽の細路分り
あゝ夏丁くくく山更よ

雨ちりりして黄濁衣と潤りり
郭へて一さひひりり茶碗と破と
通丹の布を物ある扉よき
青撰の梅も空てけ巴あん
禁ある古らんあやふこと同ん
根ありりの世ともよめりり
寂るも依徳とそいハやちりり
いもりりりふおお 糸の月
安之の弥うと淋しき床の浦
うわく写えとよ 沖の石洞

川と香氣の扉は花もあ 丸
式ハ原よ大龍の雲
欲界の修得よ火燧とさうり
の〜 換徳とさうりさうり
沖あふ総のらさひつよ〜 志め
ゆさぬ玉で久〜 くりり
月ふさいてえこよも湯きさ細うさ
勢の郭とむりりか けり
群人きふ色のたり 折さうり
を食地獄のありさぬと見む

古き時猛火と成て燃あり
大也房の大地いりり
月の秋一寸法師二道干
風多きハ之程ひ露置きハ
夕紅葉赤ひ成りて目と張れ
是ハ妙法傳の西風の賣り
ハトてあつ洞経く清傳 是
道心と撰鋪の蓮臺を系
みハ善妙ハ又ハ便り大傳り
山姥摘喰ふ 養生のそと菜

才十七

嵐竹

横雲や義之の引控五月間
度ね松きよんとそ鶴山と色
拵かつたる法水何うある種
子細な男住居何り
忘る者明ちひ四書を撰法す
糸の緒の時きりくはと少

ま川恋よ草のおうと好まぬ
局のまんまむとり時雨は
雲中り紅のほととかし
ツ胤、竜りいつれ何中りさ
山下ハ二冬かとのまありと
大歌の法と似ひぬんを
るときりお猿おてるさうり
市灯出ふあんとんのくさり
ま良茶うしを扱おさうり
山柝粒の子狸とさつる

小孤尊有つる花みあり下り
月むいとろり獺あさ夕
春の風天と暮よりちまか
由旬の氷元明りりり
山と負嶺のつらと持阿けて
夏腐と崩し浪と満ち
線波矢さけむのあまふ佛孫
多くをういさ羊ふ老成共
吉原の草の陰影のせとあり
判の目子とるし癒てま

うよひ語と蟻おむくれては種よ
穴よ技折戸立ちしる家阿る
る坊を月あもくときい 昔衣
お終いとよあくくの七巻の笠
灯心のハッ打ちりさ秋の風
お中懐きく空りはう上
帝神、お中暮の夜あうらう
頻迦の初音一おぬてそ
おてあいおふは咲ぬおふよは咲て
来うう先のそのまの春

才十八

北鯨

けさよ大海と角をおれき
律儀子鬼ハ喜を来しむ
ふの雨あやの形やお影しむ
かつらころもを、お白よおて
目口く血うつ声のふとまは
人の枝おを下着の月

云々芳野を今よむのかたき
竹川流のるり後船
小舟糸牛り帆うけくきらん
山家の阿しあち起して
鉄橋を峡しき谷も折こみ
うつま〜雲うり竜の串さし
ちあ川ひり猫奮迅の威とあひ
今樊舎の阿れ〜とも
み〜〜親にまほり〜とや
須弥より〜小刺一両

奈海を磐水入の屋のら
風と心といさる女名取〜
林うね岩七九代ち〜
時り新人本朝の車
波羅密と蓮に寺へそ越ま
石を〜ん〜ハ紗おふ封
者より童子の澄を阿つて
仙家り〜〜月うけ〜
今ハ更りき理の杪子枝橋ぬ
桐生の大根の根り〜と有

あふい又物まよ山よりきて君と終
背戸の箱のまほ久しき
感涙行は坊ととあひてぬり
まりく岡テう芳の月
初お糸地獄の百句うま色は
化生のりさ折りの宿
夕ハ雪路の折路の淋しくて
瀧雄の君の悲ひ
花うりさま花のお敵のまほと
お後のお辰 蜀紅の魁

才十九

岡松

松うけや禁よらさる折掃
袖ハケ箱お草の麻衣
牛の隈小川の月よふけ控て
時の洞あきせるあうく
了津衣合おのきれをむる
地よハ何やうきお紗の毛

送波よ打針花にて竜と紀す
若子りうきく風あつよ
吾其の如染よきく
存の内我の寐さめうきあ
あさきさきと見てもおぬの秋の
蘇も新花の分貝うき居
訪ふ人も折花の音とえくあ
夏腐も掃おけ須テの浦ハ
若汐の波なまよとよ立くれと
池例の浪よ銀花よ見ゆ

花の巴龍のりよよ道せ紀す
女紙管平よ来せまう折く
福祿寿つかりくれの序あ
風ハ月華帯雲ハ埃あり
月り通おぬれ手拭あきき
苔と毛とる洞の口紅
霧の伴お本泥の女足あり
毛のええと子と産持り
摘人のり矢と折く西あけ
志ぬま等の焼飯ひとり

回向院は茶籠のあはれと打あけ
鏡とくも男も涙ととくして
いへしこの秋よき給ふ所
大なる尾とくもと見えよ
水風呂ふ末の松山勝こえて
浦のそとへの子賀のき位
まはらぬあふらるるあまきよ
白尻きけ牛房大えん
さの毛禁ぬあひ咲りけ
時珍り日くらをまく

才二十

吟柳

鏡汁や鴉の函筆を退治の
際よハ白雪緋威の梳
き大遣の柳嵐のな流るる
巻物一巻身の屑の月
裏およ金入のきり秋ぬきて
音の毛刷毛よ高時雨降

ある医者のらんらんむあき月夜
井戸は蓋はる桐の下家
秋の習をうと捲は鞠をんて
却と世くは家のかん
空の傍の衣りせ山一祈り
小坂のささかたの尾とる
岩つら子雪の落丁みかて
松の木の万の葉物の月
よい娘を故くむるを風
恋とまるとをむとの思は

延寶八歳次庚申初夏

追加

館子

春もあし端々としるぬ物売
綱も様のちりやす波
嵐の風海塩もあつた于所
雲の灰しく砂りたるうそ
跡も羽箒巾の新田を踏むて
又運は足ゆる松の志はあ

秋の夕霞上の鐘とともめよ
六輪堂坊主寺ともてこれて
うき赤やう夏鷹の通と出ぬ
横丁の時雨店 賃の寺
やれとれう水抜の沁はあま
密山丈つれて森の 下道
さあしあき焼う何る二もら
辨や天女よこれかゝる家
思う瀬十七八の秋ふけと
波もは音りりり落す月

早棟よ花ハ志りれて水の泡
秋おきしもつきの 鳴
生枝小鷲鳥振るるぬまひり
まうり 細るあひくこのむき
鞠かまは流の四列をかゝる
紫裾濃よぬむの 袖
君の代を修史の里のふひと
うちりのくやりの令の水入
かゝる立ゆやく烟うら
津はちひさ記 虎の海

あきさきこころをふたつと
涙も餅も何れも松も
古くは書や子ともを月雲と
ぬらん世しき雲の夜も
如くは電光朝露の火乃
風邪とある半し東のし
何れせんを涙も涙の世の中
さる涙の志ほり志るあり
銀屏の姿の花のちりりれ
おぬけの孫まきを産むる

浪客 大坂市に清

東武 山崎金と歌

平あ 田中庄兵衛板

